社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

2013／12／1　No.64
発行者：社会福祉法人　ミッドナイトミッションのぞみ会
本　部：〒293-0023　千葉県富津市川名1436番地

主の道は遠大なり
（生活困窮者自立支援法と望みの門）

常務理事
井本　義孝

クリスマスおめでとうございます。本号がお手元に届く頃には臨時国会で生活困窮者自立支援法（以下支援法）が成立しているかもしれません。

千葉県は平成十六年三月、子供、高齢者、障害者、及び生活の諸問題等横断的にとらえた地域福祉計画を策定しました。

その特徴は、何時でも、つまり二十四時間、どこからでも、誰でも、理不尽な差別を受けたり、生活の上で辛い悲しい思いをする人が一人もいないように当事者に寄り添って問題解決に当たると言う画期的なものでした。失業、リストラ、貧困、虐待、引きこもり、金銭トラブルなど人事百般いろんな問題が持ち込まれました。

我が国にかつてこのような機能を持った組織があったでしょうか。誰でも知っている組織として戦後間もなくスタートした公的機関として福祉事務所があり、そして社会福祉協議会があります。前者は自治体に必置され、後者は社会福祉法人として位置づけられていて、共にその働きは地域住民の暮らしを守ることに凝縮されているといっても過言ではないと思えます。

福祉事務所が設置されて間もない頃は、生活保護業務と人権問題に忙殺された時期を経て、今日に至った歴史があります。言うまでもなく両者とも住民にとって生活安定のための組織であり、セーフティーネットでありました。

私たちは今、経験したことのない社会に突入しているように思います。超高齢社会、そして人口の減少と家庭機能の脆弱化、崩壊ともいうべき現象です。

家をなくした人、路頭に迷い生活保護に頼らざるを得ない人々に初めて、自立のための国家による支援が法で定められ、実施されようとしています。

望みの門の事業はこの十年、不採算部門の在宅支援事業の充実育成に努めてまいりました。これは担税義務を免除されている社会福祉法人の義務とも言えるものです。

新しき年は福祉が箱物から総合、寄り添い方相談事業へと流れの変わる節目となりそうです。

富津市を福祉の街に、望みの門の役割は遠大無限とも言えましょう。

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家

Tさんの召天

生活指導員　法亢　晴子

今年八月十五日夕刻、Tさんが六五歳の生涯を終えました。

Tさんは、二十数年前からの三年間を東京望みの門で生活しました。幼少の頃から辛いことの連続でしたが、寮生活を通して希望と自立の道が備えられました。退寮後は、寮の近くにアパートを借り、早朝からの清掃の仕事後、寮に立ち寄るのが楽しみの毎日でした。話し好きで、皆を笑わせたり、張りのある美声で、十八番の「港町十三番地」（美空ひばり）を歌ったりしていました。

そんなTさんが、七年前に髄膜腫のために入院・手術、その後の後遺症により中途失明。その翌年末にはS県の養護盲老人ホームH園入所となったのです。Tさんは淡々と事態を受け止めているようでしたが、その胸中はどんなだったことでしょうか。（神さまは、どうしてこのような試練をお与えになるのでしょう）

職員がH園を訪問する日は、早朝から着替えて、同行外出を楽しみに待っていてくれました。市内の回転寿司でのランチ後に、当たったら寮の職員達にご馳走するのだと、宝くじを買うのが、お決まりのコースでした。外を歩くのを怖がり、職員の腕にしっかりつかまっての小さな歩幅が、外出する度に少しずつ大きくなっていくのは嬉しいことでしたが、楽しいおしゃべりの後に、「どうしてこうなったのだろう。また見えるようになりたい。」とため息をつくTさんに、返す言葉はありませんでした。

H園での生活にも慣れ、友達やボーイフレンドも出来て、持ち前の明るさを発揮する日々でしたが、再び試練が与えられたのです。

二年前の三月に、S字結腸癌が見つかり、手術。術後の経過も良く退院しましたが、昨年末に再発してからは、ほとんど入院生活になってしまいました。お見舞に行くと、寮の様子を聞きたがり、大好きな目黒寮長が忙しくて疲れてないかと心配します。身寄りのないTさんにとって、寮長はかけがえのない大切な家族でした。肺への転移も見つかり、少しずつ衰弱していきました。「私の人生はついてない、もう長くないと思う。」とつぶやきながらも、見舞う職員の帰り道をいつも案じてくれました。

Tさんは今、痛みや苦しみから解放され、神さまのもとで平安に憩っていることでしょう。先月の退寮生会では、Tさんを偲ぶ時を持ちました。「Tさんは優しかったね」「いつも明るかったね」と想い出を語りあいました。その死は悲しいけれど、出席した皆の心が温かくされたひとときでもありました。

婦人保護施設 望みの門学園

学園の看護師として

看護師　宇山あき乃

暑かった夏も終わり、そろそろ冬将軍到来の季節がやってきました。早いもので私が学園に着任して一年が過ぎました。今まで看護師としてずっと白衣を身に纏って仕事をしてきた私にとって、白衣という鎧を脱いで仕事をすることは非常に不安定で違和感のあるものでした。まして婦人保護施設というものに対し、ほとんど予備知識なく臨んだので最初は勝手がわからず不安の連続でした。

病院と施設の違いとしては医師が常駐していないという事で、そのため看護師に求められる判断力は大きいものです。その上学園は看護師が一人ということもあり自分一人で判断しなければならないことが多いのも不安の種でした。

利用者の健康管理という事で医務室をいただいた私でしたが、現実は自分が考えていたようなものではなく、仮病や甘え、嘘に翻弄され、どう利用者と向き合ったら良いのか悩んだ時期もありましたが、日々利用者と関わ

るうちに少しずつ相手の性格も分かるようになり、より適切な判断ができるようになってきましたが、それに伴い他の面も見えてきました。顔を見るためだけに訪れる人、話をしたくて訪れる人、甘えたくて訪れる人、様々でまるで学校の保健室のような状況の中で自分なりに利用者と向き合い、話、笑い、時にもらい泣きしながら何とかやってくることができました。利用者から「宇山さんがいると安心する。ホッとする」という言葉をいただいた時、初めてこの施設での役割が分かったような気がしました。

婦人保護施設という性格上、利用者は心にダメージを受けた人が多く、体のケアよりも心のケアが重要になってきます。利用者の共通する訴えは「寂しい、甘えたい、自分を理解してほしい」であると思います。

当初私は利用者の健康管理というものを、身体を中心に考えていたのですが、心の健康というものを中心に考えなければならないと感じました。

看護師として学園の利用者を見た時に、心のケアとフォローが身体の健康に大きく関わることが分かり、改めて心身は一体なのだと感じることができました。同時に老人のケアとは違った難しさも学び日々勉強させられます。しかし利用者の笑顔で元気なれる自分があり、この愛すべき利用者の方々に心から感謝しています。

養護老人ホーム　望みの門楽生園

富浦一泊旅行

楽生園　副施設長　小嶋　友子

楽生園では、一〇月十七日、十八日に房総の富浦へ一泊旅行に行ってきました。日帰りの旅行は年に何度か行って来ましたが、宿泊の旅行は約一〇年ぶりに行いました。

最初の予定では、園の利用者を全員連れて行くという話もありましたが、利用者の日常生活動作について不自由な方もいるため、自立している利用者二十一名と職員一〇名で行くことになりました。

当日は、天候も心配することなく出発する事が出来ました。距離的にも一時間で移動できるところなので利用者の負担が少なく済みました。車中では、歌を歌ったりしてあっという間にホテルに到着しました。

ホテルでは、自由行動とし部屋で過ごす方や、ラウンジでお茶を飲む方と様々な過ごし方をしました。

夕食は、宴会場で普段施設では食べることのできない料理など食すことができました。また、カラオケを行い利用者だけでなく職員も一緒に歌い楽しい時間を過ごすことができました。宴会最後には、プレゼント争奪じゃんけん大会を行い、皆さん品物がかかっているせいか真剣な顔が伺えました。（実は職員の方が真剣だったりして……笑）

この旅行を通じて、利用者も勉強になったこともあったようです。たとえば、トイレ一つをとっても、使い慣れたところではないのでどう使うか迷う人もいました。

「外に出ることで勉強になることもあるわね」などと笑いながらおっしゃっていました

反省すべきところも多々ありましたが、利用者の皆様に事故なく無

事に園に帰園できたことに感謝いたしております。これからも利用者の意見を聞きながら、楽生園の名前のように楽しく生きられる施設づくりを目指していきたいと思います。

特別養護老人ホーム　望みの門紫苑荘

特別養護老人ホーム紫苑荘に配属されて

管理栄養士　鶴岡はるみ

四月に異動となってから紫苑荘の階段を上り下りする事が毎日の日課になり、私にとってはふと遠い昔を思い出す感慨深い時間でもあります。

私が教会学校に通っていた小学校低学年くらいの頃、四月の〝花の日〟には賛美歌を歌いにそういえばココ紫苑荘に来ていました。「階段の薄暗さ」と「意味の分からない掲示物」、「知らない場所」というドキドキな雰囲気がリンクしてか遠い記憶を甦らせます。そんな私も勤務して八か月が過ぎました。

特別養護老人ホームの栄養士としても管理栄養士としても初めての仕事のスタートでやるべき事は沢山あるのに何から手を付けたらいいのかわからない状態でした。そんな手探りの中私が始めた事といえば、まず月に一度手作りおやつバイキングの日を設けた事です。高齢者にとっておやつは栄養の補給源であり食事の一部として捉えてよいと思います。紫苑荘では毎日の利用者のおやつを週一度の土曜に『喫茶シオン』という形で過ごすようなりました。お菓子作りは上手ではありませんが何を作ろうか、何が食べたいだろうかと考えると楽しくなります。栄養満点でエネルギーも補給できるよう野菜や大豆製品、色とりどりのフルーツを使うよう心がけています。作る私も食べる利用者も楽しくをモットーに出来る限り続けていきたいと思います。また介護食スイーツの研究にも励み、誤嚥等で食べる物を制限しなければならない方も心豊かになれるひと時を過ごせるよう工夫したいと思います。

もう一つ始めた事といえば栄養ケアマネジメントです。利用者一人ひとりの栄養状態を把握し、個人に合った食事が提供されるよう栄養計画を作成します。法人内でも初めての事なので相談や質問する人も書類のベースもないゼロから始まりました。とりあえずの書式はソフトやインターネットで何とかなりましたが、肝心の目の前の利用者さんのケアマネジメントは想像以上に難しく、未だに勉強しながら取り組んでいます。毎日のミールラウンド（実際の食事場面を自分の目で見て確認する）は欠かさず、毎日利用者さんと同じ目線で過ごすようにし思いやりを持ってお一人おひとりと関わっていけたらと思います。

特別養護老人ホーム　望みの門富士見の里

『縁から』

介護員　堀越しのぶ

冬本番となり、秋には色を変え、風に舞ってしっとりとした雰囲気を漂わさていた木々の葉も落ち切り、富士見の里の一階ホールからも張り巡らされた枝の間から日々色を変える海が見えるようになり、単調になりがちな施設での生活や、利用者様はもちろん、スタッフの心にも変化をつけてくれるようになります。

オープンから一年半を越え、年間

を通しての行事や毎月行われている誕生会など、沢山のボランティアさん方の力を借りながら、職員一同奮闘しています。歌や踊り、ジャグリングなどが行われ、「良かったよ」と言う利用者様の声が次への活力となっています。敬老会には、湊幼稚園の子供たちにより、利用者様の沢山の笑顔と感激の涙も見られました。また、次回の誕生会には、湊小学校の生徒さん達の合唱も予定されており、地域との交流も進められています。詩吟サークルも毎週活動され、少しずつではありますが、充実に向けチームワークで頑張っているところです。

さて、私ごとではありますが、先日「縁」という物を考える事がありました。「縁を結ぶ」とか「縁を切る」、また「縁は異なもの味な物」などの言葉がありますが、人の縁とは不思議でおもしろい物であり、そのようになる巡り合わせなのだと思いました。

ならば一緒に働くことになったスタッフとも「縁」があり、お世話させて頂くことになった利用者様やそのご家族とも「縁」があるのでしょう。富士見の里で同じ時を過ごすことになったこの「縁」を大切に、みんなが集まって憩う場所になる「園」に、そしてチームワークで仕事ができる「円」に繋げていけるように努めていきたいと思っています。

老人デイサービス事業　望みの門デイサービスセンター

沢山の方々に支えられて

介護員　田中　椋

今年の四月から望みの門デイサービスセンターにて、勤務させて戴いています。志望動機は私の兄が自閉症という障害を持っており、その兄と日々の生活を共にしていく中で「福祉関係の仕事をしてみたい」と思い、望みの門福祉学校のヘルパー講習を受けたことがきっかけです。

望みの門デイサービスセンターの利用者様は皆明るく、元気で、活発で、中には九十五歳で腰も曲がらず、杖も使わずにいるとても元気な方もいらっしゃいます。その様なステキな利用者様にいつも助けられてきました。お風呂介助、体操、レクレーション。どれも初めての経験で、特にあがり症の私には、人前で体操、レクレーションをするのは正直苦痛でした。

そんな時職員の方々のサポート、アドバイス、利用者様からの温かい心使い。私が間違いを犯した時には笑って利用者様自身が場を盛り上げ、雰囲気を和ませて下さいます。そのお陰もあって、今では私なりに頑張らせて戴いております。

人生経験豊富な利用者様からは、いろいろな話を聞かされます。特に印象に残っている話が戦争中の話です。ある利用者様から「戦争中は夜も落ち着いて眠れなかった。食料も貧しく、着る服もボロボロだった。それに比べて、今の時代は幸せだよ」と聞かされました。他にも早くに旦那様や、奥様を病や戦争で亡くされた方々が沢山いらっしゃいます。今の世の中では、想像もつかないほどの出来事を体験してこられた利用者様方に満足して戴けるように日々の業務を誠心誠意行い、利用者様方との楽しい日々になる様、頑張りたいと思います。

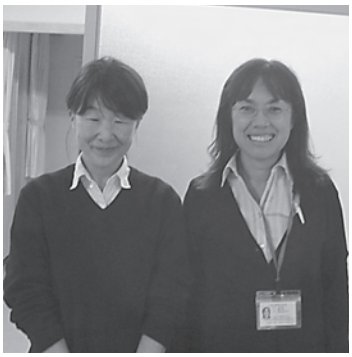
居宅介護支援事業者事業　望みの門在宅サービスセンター

念願かなって……

介護支援専門員　尾崎　睦子

四月から楽生園より在宅サービスセンターに異動になりあっ！という間に八か月が過ぎました。私がヘルパー二級の資格を取ったの

が、平成十七年の七月。この時に体験談を交えながらとても解りやすい講習をしてくださった講師が介護支援専門員。印象がとても強く残り介護の仕事に就くなら介護支援専門員を目指そうと思いました。まず訪問介護の仕事に就きましたが利用者様の家に一人で行き決められた時間内に全身清拭・着衣交換・オムツ交換を行うのはとても大変でした。排泄の処理をどうしていいのか解らず一人涙ぐみ「私には無理！」と逃げたくなったこともありました。が、不思議と慣れてしまえば利用者様の笑顔を見るのが楽しみになり技術を向上させる為に研修にも前向きに取り組むようになっていました。



三年が過ぎ介護福祉士の資格を取った頃、介護支援専門員になるには施設の経験もあった方が良いのでは、と考えグループホームで一年働き望みの門楽生園への縁に繋がって行きました。

介護支援専門員を目指していたものの養護老人ホーム？支援員？と楽生園がどういう施設なのか解らず働き始めました。大変ながらも楽しかった楽生園での支援員生活を送りながら受験資格である五年が過ぎ試験を受けましたが、一点に泣く結果に。一発合格を夢見ていましたのでショックでしたが、その分二回目は絶対合格！と自分に言い聞かせ何とか合格することができました。研修を終え登録も終え春になり在宅の介護支援専門員として異動になった時七年前に目指した目標が叶ったことに胸が躍りました。

在宅での仕事はとてもハードです。事業所からの実績報告の入力・国保連へのデータ伝送・月一回のモニタリング訪問・支援経過の入力・翌月の利用表・提供表の作成・新規利用者様の契約・アセスメントetc…。

毎月の業務の他に様々な事情を抱えた利用者様のフォロー等多岐に渡ります。

時に言葉の行き違いでお怒りをかったり、知識不足や情報不足から必要な支援に結びつかなかったり、歯がゆい思いや情けない思いに捕らわれる事もあります。

そんな新米ですが縁があって関わらせて頂いている利用者様や取り巻く環境を大切に小さな絆が強く太い絆へと変わっていけるよう、つまずきながらも前へ！前へ！成長して行きたいと日々奔走しています。九月から加わった楽しい仲間と共に…

訪問看護ステーション　望みの門訪問看護ステーション

大切な事

看護員　及川　貴子

望みの門に訪問看護ステーションができて、八ヶ月が経ちました。私の入職は訪問看護ステーションと同時でまだ八ヶ月余りです。病院での看護の経験年数は長いのですが、訪問看護の仕事自体、実は初めての経験であり、入職してからは勉強の毎日です。

訪問看護の仕事自体あまり知らない方が多いと思われます。これを期に訪問看護の仕事を理解していただければと思います。

訪問看護が利用者さんに行なうケアは、病院とほとんど変わりません。また訪問看護の仕事は、常に利用者さんとその家族を中心に看護を提供しなければいけません。ご自宅に訪問する訳でありますから、利用者さんと家族に対して、自分の身内のように深く関わる事が必要に

なってきます。また、医者の同行がない為、自らの判断能力が必要であり、判断を間違えれば命に危険を及ぼす事となる大変な仕事です。

また利用者さんや家族と密に接する事により死期の近い利用者さんに対して、今まで病院でも多く経験してきたはずなのに、その時よりも遥かに悲しく辛いと感じました。特に訪問看護は、亡くなった利用者さんの家族に対して、その後のケアを行なっていきます。残された家族の思い等を聞き、ケアしていきます。実は最近そのケアを行なってきました。

やはり、利用者さんの遺影や家族の顔を見ると、涙が出そうになりました。しかし、そんな感情を持つ事は、看護の基本であると同時に、日常でもすごく大切な事であると私は思います。他人の事をあまり考えない世の中である今、私はこのような感情を常に持たせてくれる訪問看護の仕事に就けた事、心から感謝したいと思っています。

就労継続支援事業　望みの門新生舎
「社会学習旅行」から学ぶもの

生活支援員　渡邉　宏子

去る十一月九日（土）毎年恒例の社会学習旅行を実施致しました。

新生舎では働くことの喜び・楽しさ・難しさを学ぶ生産活動とともに、日常的な生活支援の一環として余暇活動を通した社会でのルールやマナーを学ぶ機会を設けています。

社会学習旅行の実施にあたっては、「毎日出勤することの大切さ」を伝え、日頃の頑張りが評価されるところであり、規定の出勤日数をクリアされた方にボーナスを支給し旅行費用にあてることとしています。

今年も利用者さんの頑張りがあり、熱望されていた東京ディズニーランドに行くことができました。

三十周年の記念の年ということとクリスマスイベントが始まっての最初の土曜日で大変な混雑が予想されましたが、施設長の「障がいを持っているからといっていつも安全で守られた環境だけで過ごすのではなく、障がい者であっても社会でいうところの当り前の環境にどんどん出て行き社会経験を一つでも多く積むことが大切なんだ。」という意向もあり、あえて混雑を避けることはしませんでした。実際どこを見ても「人・ひと・人」でしたが、乗り物の乗り方や食事・買い物の仕方など工夫し、自分でできることは出来るだけ自分で取り組むことを経験し、満足のいく旅行となりました。

社会学習旅行は、利用者さんにとって目に見える「頑張りの成果」であり、意欲の向上につながる教材でもあります。実際出勤日数の不足によりボーナスの支給対象とならず実費で参加した方もいますが、厳しい現実を伝えることで新たな支援の方向性を見い出すことにもなります。

私たち援助者は利用者さんに様々な体験の場を提供し、「自分でできること」をひとつでも多く増やすことで成長に繋げていきたいと考えます。「また来年も行こうね！」を合言葉に今日も頑張る新生舎の皆さんです！

特定相談支援事業　望みの門ベテル
初めまして、相談支援事業所「望みの門ベテル」です。

管理者　三橋　信康

この度、十月一日に富津市から指定を受け、皆さんの仲間入りをすることになりまし

た相談支援事業所「望みの門ベテル」と申します。職員は管理者と相談支援専門員の二名のスタートです。

これまで障害福祉の分野は措置制度から支援費制度へ、この支援費制度の定着を見ないうちに自立支援法の制定、さらには平成二十五年四月一日からは「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律」（障害者総合支援法）の施行とめまぐるしく変化しています。このような中、平成二十四年四月の制度改正により支給決定プロセスの見直しが行われ、障害福祉サービスを利用する方は「サービス利用計画」を作成した上でサービスを利用することとなり、平成二十七年三月末までに全ての対象者について実施することとなりました。これを受けて市町村は、指定を受けた相談支援事業者が作成するサービス等利用計画案の提出を求め、これを勘案して支給決定を行うこととされています。望みの門ベテルはこのサービス利用計画の作成と支給決定後のサービス等利用計画の見直し（モニタリング）が主な業務となります。

このサービス利用計画とは、障害福祉サービスを利用する方が「どのサービスを利用するのがよいのか」「現在のサービスを継続して利用したい」「事業所はどこにしたらよいのか」などの相談に指定された相談支援事業所が対応し「サービス利用計画」を作成し、サービス提供事業者との連絡など、実際にサービスの利用に至るまでの過程を支援する仕組みです。措置制度と異なり福祉サービスを自己責任で決定していく上でこの相談支援事業は非常に大事な役割を担っているといえます。今後とも、相談者の話をしっかり聞き取り、本人・家族の思いを大切にしながら、より良い福祉サービスの提供に向けて業務にあたっていきたいと考えます。どうぞよろしくお願いいたします。

共同生活介護・援助事業　グレースホーム

還暦を前にして思うこと

世話人　角谷　幸子

私は料理を作るのが好きです。料理をしていると無心になれ、ストレス解消や気分転換にとてもいいようです。ホームでも利用者さんが希望のメニューを言ってくれればできるだけ応えてあげたいし、一緒に料理をすればとても盛り上がります。中でも、カボチャとさつま芋のサラダは好評で、マヨネーズにヨーグルトを同量加えるというオリジナルな味付けを喜んでもらえると嬉しくなります。

大体どんな家庭料理にも自信があり苦になりませんが、ただひとつ、魚をさばくことができません。母が上手だったので、それに頼っていたからかもしれません。自分でできるようになったらレパートリーも広がり、利用者さんにもかっこいいところが見せられるので、来年の目標にしたいと思っています。ホームの利用者さん、期待して待っていてくださいね。

自宅では家庭菜園に夫と励んでいます。手間暇をかけた野菜たちはとても美味しく、たまにホームにもお裾分けをします。普段あまり食卓に登場しないラディッシュ等はみんな興味津々、目にも口にも花が咲き、これもまた嬉しいひとときです。

休みの日には庭の手入れ。これがなかなか大変で、雑草は生えるし木はどんどん大きくなる。木は適当に切ると花が咲かなかったりします。人間と同じでそれぞれ個性があり、手のかけ具合で違いがあるようです。時間があれば丁寧にきれいに世話をしたいと思うのですが、今は仕事優

先です。仕事が楽しく、働いていられることが幸せと思うし、有難いと思うので。でも、いつかは花壇にお気に入りのバラを植えたいと思っています。バラは手入れが大変で、それこそ愛情たっぷりに面倒を見ないときれいな花は咲かないと言われていますので、まだまだ先の楽しみにとっておこうと思います。

なにしろ今は、ホームの利用者さんに注ぐ愛情で手一杯ですから…。

地域活動支援センター　望みの門ヨカデイサービスセンター

買い物外出

管理者　藤崎　美智

望みの門ヨカデイサービスセンターは、地域活動支援センターとして、入浴や・食事等のサービスを提供していますが、その他様々な活動もあわせて行っています。そこで今回は、利用者の方々がとても楽しみにしている「おやつ作り」や「調理実習」での買い物外出について、ご紹介したいと思います。

おやつ作りや調理実習は、年間計画のもと月一回程度それぞれ実施しています。メニューは、利用者さんからの希望を伺いながらみんなで決めることになります。みなさん「食べる」ことにはとても関心があり、様々な意見が出されますが、なるべく季節感を感じていただけるようなメニューになるようにしています。さて、メニューが決まると、おやつ作りや調理実習の前日に材料を揃えるため買い物に出かけています。年度当初は、前日に食材を購入していたのですが、「買い物に行ってみたい」という利用者さんの声もあり、できる限り前日に利用者さんと一緒に買い物に行くことができるよう予定を立てることにしました。自分たちがお店に買いに行くことで、職員が準備した材料を調理するだけではなく、スーパーに出かけ季節の食材を見たりすることも、調理という活動場面に広がりをもたせることができます。実際この買い物外出は、みなさんがとても楽しみにされています。スーパーでは野菜や魚・肉など食材を手に取り、陳列棚の食品を見て「おいしそう」、「今度はこれが食べたい」などど、買い物を楽しんでいただけているようです。

前日から準備して、自分たちで作ったおやつや食事はひと味違うのか、いつのも増して食欲旺盛です。大きな鍋に入っていたサツマイモ豚汁や栗ご飯・芋煮などあっという間に空っぽ！　利用者さんの満面の笑み！　これからも、利用者さんに喜んでいただけるよう、活動内容を充実させていきたいと思います。

千葉県中核地域生活支援センター　君津ふくしネット

この地でお世話になることとなり

相談支援員　山口　誉典

このたび、ご縁がありまして社会福祉法人ミッドナイトミッションのぞみ会中核地域生活支援センター君津ふくしネットの相談支援員として平成二十五年十月一日付で拝命いたしました。私は、この九月まで、「西には箱根連山」・「東には丘陵地帯」・「中央には南北に川が流れる足柄平野」・「南に相模湾」に面した地形と風向明媚な自然環境で夏は涼しく冬は温かいという気候のなかで、「みかん」と「梅」をはじめとした農産物豊かな地域であります神奈川の県西地域で生まれ育ち、これまで歩んでまいりました。

時の経つのは早いもので、十月からお世話になり二ヶ月が過ぎようとしております。思いとして、まずは日々の業務と並行し、「地

域を知り」・「地域にとけこむ」ことを目標にと努めているところでございますが、なかなか思ったように事は進みません。業務では待ったなしで絶えることなく相談者からの多種多様な、「苦痛の叫び」とも思える相談が入り、その問題の解決に向けた訪問や関係機関等との調整に、上司や先輩職員からの温かい助言と励ましに力づけられながら日々奮闘しているところでございます。今、自分は何をすべきなのか、何をしてあげることが相談者の「求め」に答えられるのか、混乱のなかで自問自答の毎日を送っております。微力ではありますが今後、社会福祉法人ミッドナイトミッションのぞみ会の職員としての、「誇り」を忘れずに、君津ふくしネットの一員として働けること働かさせていただけることに、「感謝」するとともに、相談者の「求め」にたいし的確で最適なゴールに導けるよう、自己を磨き互いの幸せの向上に役立つよう努めていきたいと思っております。日々の業務への、「敬意」と、この職に就けたことに、「深謝」の念を忘れずに、ご縁があったこの地で、「終の仕事」となるよう努めていく所存でございます。どうか今後ともよろしく御指導・御助言お願い申しあげます。

児童養護施設　望みの門かずさの里

子どもとの関わり

保育士　三嶋　智宏

かずさの里に勤務する様になり、早一年余り経ちました。当初、未知である児童養護施設での仕事への不安と、様々な媒体から得た養護施設に関する情報から自分なりのイメージが生まれ、かなり身構えて勤務し始めたことを思い出します。一言に「子ども」と言っても幼児から思春期を迎えた高校生と年齢幅もあり、自分がどこまでそれぞれの年代に対応できるのか、受け入れられるのか、又、逆に受け入れてもらえるのかと、不安が募りました。正直な所、一年余り経った今でも、子ども達の生活に溶け込めているのだろうかと、不安や自分の不甲斐無さを感じる事が多々あります。ただ、一年余りの経験を積む中、自分なりにこだわった事があります。それは以前子どもと接する仕事をした中で、崩さず大事にしてきたものです。

一つは言葉使いであり、一つは自分の空気・印象です。身近にいる人の言葉遣いで、子どもの生活感も変わり、さらには生活スタイルにも影響するものだと考えています。各年代での流行言葉の良し悪しや、マイナス的なイメージの言葉に気を付けて、子どもと接する様努めています。乗りの悪い、又、面倒くさい大人等の印象を与えてしまうという面もありますが、大事にすべきものと考えています。そして「ありのままの自分」として接して行きたいと言うことです。無理に背伸びをせず、素の自分を大切に、自分のままで良い事を子ども達にも伝えて行きたいです。自分自身も人として成長して行きながらも飾らない「ありのままの自分」、を大切にしたいと思います。

その中で、子ども達がどこかで少しでも安心感、信頼感を持ってくれたならと思います。また、自分との関わりが子ども達の暮らしの一部になれたなら、と考えながら今後も接していきたいと考えています。

乳児院　望みの門方舟乳児園

私の宝箱

施設長　白鳥　正道

庭で聞こえる虫音も季節の移り変わりを告げています。花や木々でさえこれから向かう冬の支度を始めています。庭の真ん中に植樹された記念菩提樹も今では葉をすっかり落とし、細い枝のみの寒々しい姿になりました。そんな中でも良く見ると、枝にはいくつもの大きな芽を付け自分の出番を待っているようです。

子ども達は毎日外で元気にはしり回ります。外遊びはみんな大好きです。夏に比べ少し動きにくそうではありますが、精一杯遊んでいる様子が見られます。時には富士見の里のおじいちゃんやおばあちゃんの顔を見にちょっとした探検に行きます。知らない人とふれあえる貴重な空間です。

最近現場から一つの提案がありました。それは「自分のもの」を持たせるということです。何をそんな当たり前のことをと思われるかもしれませんが、今まで実践できていない課題でした。食器やタオルなどは今までも個人別になっていました。しかしおもちゃについてはみんなの物で自分の物という管理はあえてしていませんでした。

私が小さい頃自分用に引き出しを与えられていた事、そこを宝箱のように使っていた事、中には自分にとって大切な物を入れていた事など思い出されます。また、それは誰であれ勝手に捨てることはなく、すべては自分に任されたスペースでした。自分ひとりで出したりしまったり小さいながらも大変満たされていた記憶をたどることができます。

個別化することで自分の所有物という認識と喜び、片づける意欲にもつながると養育指針にも謳われているとおり、方舟乳児園でも取り組める課題だと考えます。実施する前に、個別化する意味、取得・保管方法、使いやすさなど検討を重ね、子ども達が管理しやすいよう配慮します。もちろん大人の協力は不可欠ですが、自己肯定観と愛着を育て「あたりまえ」の経験をごく自然に提供できる乳児院でありたいと思います。

児童家庭支援センター　望みの門ピーターパンの家

望みの門ピーターパンの家主催「支援者のための幼児動作法勉強会」開催！

心理相談員　新藤　紀子

「子どもにまつわるよろず相談所」としてピーターパンの家が開設されてから八ヵ月が経とうとしています。「空っぽの部屋に電話線一本」のあの頃から、十月の総相談件数は二百三十三件。今では一つの相談機関として着実に認められつつあります。しかしそれは、私たちの努力だけで成し遂げたものではありません。市町村の各機関をはじめ、近隣の保育園・幼稚園、県内にある他の児童家庭支援センター、児童養護施設等との協力・連携、そして地元の方々の暖かいご理解とご協力がなければ到底成し得なかったと思います。

この「よろず相談」をもっと専門的にそして他機関との連携を増々強化してゆくために、十一月九日、私達は臨床心理室のスタッフと共に各連携機関の専門家の方を招いて、支援者のための心理療法の勉強会を開催しました。

さて世の中に「心理療法」は数多くありますが、「動作法」ってどんな療法なのでしょうか？　人は「動物」です。生きていてどこも動かない人はいません。人は動きながら考え、考えながら動きます。その「動作」が楽

にでき、自分が「こうしよう」と思った通りに動くことができたなら、人はどんなに生きることが楽しくなることでしょう。

しかし、残念ながらそうはいきません。特に身体に障害がなくても「思うように動けない」という悩みを抱えているのが私たち「人間」という存在です。「肩をあげましょう」あなたは今本当に「肩をあげた」のでしょうか？腕をあげることによって「肩があげられた」のではないでしょうか。もしそうだとすると「肩をあげる」ために「腕をあげる」→腕が上がったから「肩があがる」けれどその結果、腕の筋肉がコチコチにこってしまいます。それは望んでいることではありません。そんなことは他にも、「仕事を頑張ろうとすると肩がこる」、「あの人と挨拶しようとすると顔がけいれんする」、「字を書こうとすると手が震えてしまう」など、自分が思うようにいかないから、自信を失い、自分は大丈夫かと不安になる。不安があるから新しいことにチャレンジできない。そしてそんなことが重なるといつか行き詰ってしまう。「動作法」は、そんな悩みを抱える方に寄り添って「自分の体を感じる」スタートラインに立ち、微細な筋肉の動きに敏感になって、「軸を立てること」を習います。すると「座る」、「立つ」ことがこんなに気持ちよいことだったと気づくでしょう。人は1歳そこそこで立って歩きます。でもその立ち方と、今「動作法」の療法家に寄り添われて「立つ」立ち方とは異なります。

後日、「今回初めて」という参加者の方から、「自分の姿勢がゆがんでいたことに気づきました」「今までやれなかったことに対して動ける自分を発見しました」、と生き生きとした表情を見せていただいて、主催者として大いにやりがいを感じ、同時に支援者として今後の連携が取りやすくなったようにも感じました。自分が元気でなければ元気な支援はできません。今後とも支援者支援にも力を入れていきたいと考えています。

助成金による公用車の配備

このたび、一般社団法人中山馬主協会・公益財団法人中央競馬馬主社会福祉財団からの助成により八人乗り乗用車（トヨタ VOXY）を配備しました。

これにより、利用者の通院、行事等の利便性が大幅に向上することが期待できます。

ここに、ご報告と共に関係者の皆様に謹んで感謝申し上げます。

・総事業費
　198万円
・助成額
　118万円

編集後記

待降節が一日から始まるのは珍しい。十二月を迎えた。お手許に本号が届きましたでしょうか。今年も田尻編集長にはいろいろとご苦労をおかけしました。さて、四一五キロ上空には若田さんが宇宙ステーションで働いている。しかし、子供にはサンタさんの夢は必要。社会は富める人と貧しき人とが分別され、生き辛く、悲しい思いで過ごす人々は跡を絶たず異業種の参入と共に福祉の業も商業化されていくのも時の流れの感があるが、社会福祉法人の奮起が促されている。

今月には「生活困窮者自立支援法」が成立し、二〇一五年から全国の市町村に「相談窓口」の設置が義務付けられる。しかし法は万能でなく施行は人間である。心して運用にあたらねばならない。まことに「主の道は遠代である。」せかず忙がず地域福祉を充実させよう。（Y・I）